様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００７６４

研究課題名（和文）高大連携の英語ライティング指導体制の構築ー高大の教員が協働で行う指導書作成と研修

研究課題名（英文）Building a system for teaching English writing in high school-university collaboration - Creating a Instructional text and conducting a workshop

研究代表者
山下　美朋（Yamashita, Miho）

立命館大学・生命科学部・准教授

研究者番号：２０７７９０２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、「英語ライティングにおける高大連携の指導体制」を構築することを最終目標とし、全国15の高等学校で、英語ライティング指導を高大双方の教員が協働で考え、実践した。最終年度には、3年間の実践指導の集大成として、主に高校の先生を対象としたライティング指導書となる書籍を本研究者６名で執筆し刊行した（「英語ライティングの指導 基礎からエッセイライティングへのステップ」三修社）。本書では、ライティング理論と指導実践を紹介する流れで構成した。またパラグラフ以前の指導からエッセイまでの指導を段階的に指導する方法を示した。出版に先立ち、書籍の指導に基づいた講演会とワークショップを開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の意義は、これまでに多くの研究者や現場の教員に指摘されつつも行われてこなかった高大連携のライティング指導を高大双方の教員が集まり実際に行うことそのものにあったと言える。大学の教員の知見に基づく最新のライティング指導法を高校の現場の教員と共有し、現場に適した教育ができるようにした。また逆に現場の実践から見えてくるものを、ライティング指導理論に反映することができ、指導法理論と実践が双方向に資する高大連携となった。そのうえ、研究の関係者だけに留まることなく研究成果を、広く現場の教員に役立つ指導書という形にし、研修を通して教員のライティング指導力向上につなげることができた。

研究成果の概要（英文）：In this research project, under the ultimate goal of building a 'high school-university cooperative teaching system in English writing', teachers from both high schools and universities collaboratively conducted English writing instruction at 15 high schools across Japan. In the final year of the project, the members of this project published a writing instruction book mainly targeted for high school teachers (The title of this book is 'Teaching English Writing: Steps from the Basics to Essay Writing', Sanshusha). The book is structured in a way that introduces writing theory and teaching practice. It also provides a step-by-step method of teaching writing from pre-paragraph to essay writing. Prior to publication, lectures and workshops based on the book were held.

研究分野：外国語教育、第二言語ライティング

キーワード：英語ライティング指導　高大連携　実践指導　ライティング指導書　研修

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2022 年度から全面的に施行となった新高校学習指導要領では、外国語科に「論理・表現I,II,III」が設置され、「論理的思考力」の醸成と「論理的に（英語で）書く」指導が求められていた。また大学でも、日本の研究論文の発表数が激減している状況にあり、文部科学省が推進するグローバル化や研究力強化のもと「英語で論理的に書く」力の養成は必須であった。そのため、高校から大学への継続的・横断的に「英語で論理的に書く」力を育成することは急務であった。しかし、高等学校では「英語で書く」指導は必ずしも重要視されてきたとは言えず、指導側が充分なライティングの指導力を備えているとは言い難い状況であった。その根拠として、Yasuda, S., Oi, K., & Itatsu, K. (2014) の調査では、高校時代にパラグラフ・ライティングを経験した学生もいるが、未だに英文和訳を中心とした活動が多いと報告されていた。また、本研究の分担者の山岡が、2019 年 7 月に立命館大学の学生 400 人を対象に行ったアンケートでも、半分以上の学生が高校時代にパラグラフ・ライティングを全く経験をしていない、あるいは年に数回程度の経験であった。また、書いた経験があっても「特に指導は受けなかった」と答えた学生が 3 割いた。そのため、大学入学後に英文でエッセイを書く授業において、英語で書く力、特に「論理的に書く」力の欠如が指摘されていた（Yasuda, 2006; Tsuji, 2016）。日本人大学生の英文の問題点として、1) パラグラフ概念の欠如 (Nishigaki & Leisheman, 2001; Yamashita, 2018)、2) 根拠の弱さ(Yasuda, 2006)、3) 直線的でなく読み手に推論させる論理展開であること (大井, 2005) が指摘され、それが“論理的な”流れを作る際の障害となっていた。学生が論理的な英文を書けるようになるためには、適切な指導を受け、書く訓練を繰り返すことが欠かせない（Rinnert & Kobayashi, 2007）。しかし、前述の大学生の書く英文の問題は、大学入学前までに論理的な英文の基本となるパラグラフ・ライティングの指導が徹底されていないためであると示唆され (Yamashita, 2018)、特に高校での意図的な指導が必須であった。

２．研究の目的

本研究の目的は、「英語ライティングにおける高大連携の指導体制」を構築することである。高等学校から大学につながる英語ライティング指導を双方の教員が協働で考え、実践する。具体的には、1) 高校から大学へ継続的な指導ができる「英語ライティングの指導書」を作成し、その指導案に基づいた授業実践を行う。2) 指導においては、「論理的思考力」を醸成するための書く指導に焦点を置き、「書く」という行為を通じて生徒や学生が自ら思考し、論理的に表現できる力を養う。3)1)の指導書をもとに「高大の英語教員を対象としたライティング指導研修」を行う。研修を受けた教員が Web 上のコミュニティーで情報発信し、多くの教員が効果的なライティング指導を共有する。これまで高大の教員が現場の問題を共有し、生徒・学生のライティング力を伸ばす指導を共に考え、実践する研究は行われてはいない。本研究はそのプロトタイプ的な指導および研修体制の設立を目指す。

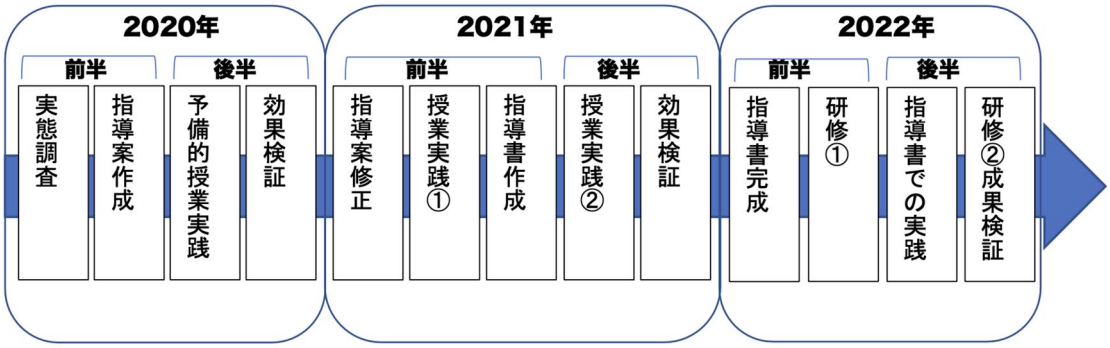
３．研究の方法

研究方法は、まず高校現場のライティング指導状況を把握することから始めた。そして実践校を選定し、実践校の教員と大学の教員とがライティング指導を考えともに教案を作成、高校の教員が実践する流れで進めた。
具体的には、以下の流れで行うことを計画していた（図 1 参照）。

2020 年度[予備研究]：1)高校、大学のライティング指導の実態調査。教員、生徒・学生へのアンケート調査から指導経験や指導を受けた経験などを知り、生徒・学生の英語で書く力の測定を行う。また、高校のライティング授業を観察し、指導実態を知る。2)1)に基づき指導案を作成し、高等学校 2 校（立命館高等学校と滋賀県立米原高等学校）の複数クラスでパラグラフからエッセイに至る指導案に基づいた予備的な授業実践を行う。
2021 年度[本格的な指導実践]：1)1 年目の予備実践をもとに指導案を修正・加筆し、指導書を完成させる。2)実践校を増やし（京都市立紫野高等学校、福井県立藤島高等学校、東京都立松が谷高等学校その他）、指導書を使った本格的な授業実践を行う。授業実践を 2 回行うのは高校の状況に応じて数種類のパラグラフを教える、またはパラグラフからエッセイへの指導を行うためである。3)2)の指導を受けた生徒が書いたパラグラフやエッセイを分析し指導の効果検証を行う。英文の評価は、主張と根拠、接続詞など論理側面を見るルーブリックを使う。
2022 年度[効果検証による振り返りと研修の実施]：効果検証から指導書を更に充実させ、高校の教員を中心とした研修を実施する。具体的には、夏休みを利用してパラグラフやエッセイを

書かせる指導手順についての研修①を行い、2 学期に実践、冬休みの研修②で実践の振り返りを行う。本研究で予定している授業実践の手順は、プロセス・ライティング指導に従う。具体的には、[アイデア創出・論点をまとめる活動→アウトライン作成→教員によるフィードバック→パラグラフ（エッセイ）の初稿作成（必要であればアウトラインの修正）→教員によるフィードバック→第 2 稿作成→（必要であればフィードバック）→パラグラフ（エッセイ）の修正、完成]の流れで実施する。このサイクルは 1 学期間（3 ヶ月程度）である。

図 1 研究の流れ



４．研究成果

まず、ライティング指導の現状を把握するために、全国の高校英語教員 50 名にアンケート調査、またその一部の教員に追加のインタビューを実施した（2021 年 2 月から 4 月）。アンケートから、多くの先生がライティング指導を「英語表現」「コミュニケーション英語」いずれの授業でも積極的に取り入れており、意見文、要約文、描写文、説明文を筆頭に、４技能を満遍なく伸ばすためライティングと他技能（発話活動など）を結びつけた指導を行なっていたことが分かった。先行研究（Hirose & Harwood, 2020）では、ライティング指導に消極的な教員が多いことが報告されていたが、本研究でアンケートに参加した先生は、過去に指導研修などに出席して、比較的ライティング指導を重要視した方々であったことが推測された。しかし、これらの先生も、ライティング活動を行う際に困難な点があることを挙げており、それらは 1) ライティング活動の根本的な難しさ（添削や評価に時間がかかる, 評価の難しさ, 入試科目にない、など）、2) 教員の問題（指導のコンセンサス形成、教員の英語ライティングに関する知識不足および指導力不足）、3) 生徒の問題（ライティングに関する知識不足、経験不足、モチベーション）であった。

アンケートとインタビューの結果から、指導実践をジャンル別（パラグラフ・タイプ別）で段階的に行うこと、指導に繋がる評価やフィードバックのあり方を高大の教員が共に考え指導することが重要であることが提案された。また、指導の困難点を解決し、ライティング指導力を上げるための研修やワークショップの必要性も確認された。

研究期間全体を通して、全国 15 校で指導実践を行うことができ、その成果を JAAL in JACET などで発表してきた。また、最終年度には、3 年間の実践指導の集大成として、主に高校の先生を対象としたライティング指導書となる書籍を６名で執筆して刊行した（「英語ライティングの指導 基礎からエッセイライティングへのステップ」三修社）。執筆にあたっては以下の点を強調した。1) 理論に基づく指導と豊富な実践例として、ライティング理論の説明から、それらを根拠とした指導実践を紹介する流れで構成した。2) パラグラフ以前の指導からエッセイまでの指導を段階的に指導する方法を示した。3) パラグラフ・タイプに基づく指導：新学習指導要領に準拠した叙述文、描写文、説明文、意見文・論証文の 4 つのタイプの指導法と活動例を網羅した。4) ディベートやプレゼンテーションなど他の言語活動につながる指導案を示した。また、本書の出版に先駆け、2023 年 2 月 25 日に書籍の指導に基づいた講演会とワークショップを、立命館大学いばらきキャンパスにおいてハイブリッド形式で開催した。

しかし、研究期間内で達成できなかったこととして、コロナ期であったため、単発的な実践に留まり、各実践の成果検証に及ばなかったことが挙げられる。また、Web 上のコミュニティーで指導案などの情報発信をすることもできなかった。将来の実践事項として挙げておきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 山下美朋・藤岡真由美・山中司	４．巻 5
２．論文標題 高大連携の英語ライティング指導の課題と展望	５．発行年 2023年
３．雑誌名 JAAL in JACET Proceedings Vol. 5	６．最初と最後の頁 75，81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山下美朋・藤岡真由美・山中司	４．巻 4
２．論文標題 高大連携英語ライティング指導―PBLとプロセス・ライティングを通じた教師と生徒の学び―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 JAAL in JACET Proceedings VoL. 4	６．最初と最後の頁 78，85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山下美朋・藤岡真由美	４．巻 3
２．論文標題 高大連携の英語ライティング指導と指導書作成への取り組み	５．発行年 2021年
３．雑誌名 JAAL in JACET Proceedings	６．最初と最後の頁 101，108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 河野円	４．巻 3
２．論文標題 大学における5段落エッセイ(Five-Paragraph Essay）を用いたライティング指導ー議論構成に焦点をあててー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 JAAL in JACET Proceedings	６．最初と最後の頁 85，92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 山下美朋・藤岡真由美・山中司
２．発表標題 高大連携の英語ライティング指導の課題と展望
３．学会等名 第5回JAAL in JACET（大学英語教育学会）学術交流集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 山下美朋・藤岡真由美・山中司
２．発表標題 高大連携英語ライティング指導 ―PBL とプロセスライティングを通じた 教師と生徒の学び―
３．学会等名 第4回JAAL in JACET（大学英語教育学会）学術交流集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山下美朋・山岡憲史・山田浩・藤岡真由美・三仙真也・武田菜々子
２．発表標題 日本の英語教育におけるライティング指導はどうあるべきか？ ―高大連携の英語ライティング指導への取り組みから―
３．学会等名 The JACET 60th Commemorative International Convention（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山下美朋・長倉若
２．発表標題 高等学校における英語ライティング指導の実態調査 ―学校では何が教えられているか？―
３．学会等名 全国英語教育学会　(JASELE)　第46回長野研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 河野円・隅幸子・峰松愛子
２．発表標題 新課程英語ライティング教育を高大連携で考える
３．学会等名 JACET教育問題研究会主催　言語教育エキスポ
４．発表年 2022年

１．発表者名 山下美朋・藤岡真由美
２．発表標題 高大連携の英語ライティング指導と指導書作成への取り組み
３．学会等名 第3回JAAL in JACET（大学英語教育学会）学術交流集会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 長倉若・峰松愛子・柏木桃子
２．発表標題 五感を使った英語表現の指導実践報告ー高校一年生への描写文のジャンル指導ー
３．学会等名 関東甲信越英語教育学会　第44回オンライン研究大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 編著者：山下美朋、著者：河野円、長倉若、峰松愛子、山岡憲史、山中 司	４．発行年 2023年
２．出版社 三修社	５．総ページ数 244
３．書名 英語ライティングの指導: 基礎からエッセイライティングへのステップ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2023年2月25日　明日からの授業が楽（らく）になる！基礎から段階的に教えるライティング講演会・ワークショップ(高大連携ライティング指導科学研究費メンバー主催　（山下美朋・河野 円・長倉 若・峰松愛子・ 山岡憲史・山中 司）　場所：立命館大学いばらきキャンパス（ハイブリッド開催）

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	河野　円 (Kawano Madoka) (20328925)	明治大学・総合数理学部・専任教授 (32682)	
研究分担者	山中　司 (Yamanaka Tsukasa) (30524467)	立命館大学・生命科学部・教授 (34315)	
研究分担者	山岡　憲史 (Yamaoka Kenji) (90469114)	立命館大学・教育開発推進機構・教授 (34315)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関